

量的緩和の効果について

ちょっとした無力感を感じているのは私だけではないだろう。黒田総裁もイエレン議長もドラギ総裁も、無力感のみならず徒労感さえも感じているはずだ。量的緩和の経済効果は限られた状態でしか生まれない。これが現実だ。予想はしていたことであるが、この新手の新技も、万能ではない。

もうじきエコノミストがこぞってこの話を書くと思う。私のレポートや資料はあちらこちらで流用されている。ある証券会社ではそっくりそのまま使われているし、とある新聞ではテレビで放送された翌日に紙面を飾っている。このレポートも本来は会員向けではあるが、会員の中には金融界の人間も新聞社の人間もいる。別に著作権があることでもないので止めるわけにはいかないのでライブラリに載せておく。

また横道にそれるところだった。無力感を感じているのはそんなセコイ話ではない。量的緩和の話だ。

「量的緩和策はデフレを食い止めることは出来るが、インフレにすることは出来ない」

これがこれからの答えになるだろう。確かに日本はマイナスインフレを脱した。しかしCPI +2%の達成など到底無理な話である。米国も+2%程度まではインフレ率が上昇し経済成長速度も2%程度までは回復したが、それ以上ははっきり言って無理である。欧州もまた辛うじてデフレを食い止めることは出来たが、インフレに持っていくことはまず難しい。

結局のところ量的緩和策は不況によって経済にぽっかり空いた穴（GDPギャップ）を埋めることまでは出来るのかもしれないが、そこから先は経済そのものが頑張れるかどうかで決まる。経済そのものが頑張れるかどうかというのは、民間がアニマル・スピリットを持ち、設備投資を行い、人を雇い、新商品を開発していくことで決まる。

しかしこうしたガッツあふれる行為は量的緩和策からは生まれない。だから日経平均20,000円までは穴を埋めることで達成できた。しかしそこから上は、もっと頑張れる世の中が始まるかどうかで決まるのである。おまけに穴が完全にふさがったのならば金利は正常化に戻り、貯金はあるけど働けない人々にいくばくかでも利息を払ってやらねばならない（これからは投資の時代だから株を買え、金利がゼロだから株を買え、しかも自己責任で株を買え、というのはあまりにも傲慢で野蛮な考え方である。一つ前の時代の人間が言う言葉である）。

量的緩和でインフレを生み出すことは無理である。日銀の追加緩和は何をやっても最終的には失望に変わる。どうしてもインフレにしたいというのならば、それは為替が150円になるという結末に至り、同時に日本の財政は金利上昇から破たんをする。勿論、それでも別にかまわない。我々はこれを利用してまた戦略を組み立てるだけの話だ。